

## 漁師列伝 No.2



## 「魚を獲るだけが漁師の仕事じゃない」

水産総合研究センター開発調査センター 所長 井上清和

鳴き砂で有名な琴引浜にほど近い、風光明媚な京丹後市網野町の京都府漁協網野支所があります。そこに所属し定置網漁業と一本釣りを営む松尾省二さんを紹介いたします。松尾さんのお父さんは自営の「丹後ちりめん」の織物工場を閉めた後、組合自営の大型定置網の乗子を経て、共同で小型定置を営むようになったそうです。その後、共同経営者が次々と辞めることとなって、単独の自営定置に切り替える際の手続きに大変時間がかかり、当時子供だった松尾さんも漁業法や水産業協同組合法を読んでみたそうです。このお話を聞いたときに松尾さんのたくましさの原点を見たような気がしました。



写真：定置網漁業に使用する船の上にて、松尾省二さん。

## 故郷に戻り、漁師になりたい

高校卒業を控えた頃、松尾さんはデザイ

ン関係の仕事を目指し、大阪の服飾販売会社に就職して、販売だけでなく広告デザインや企画・販売まで手がけたそうです。本人は大阪の暮らしが気に入っていましたが、ある朝、近くで電車が通るたびに揺れるアパートで歯を磨いているときに、痛切に「故郷に戻りたい」という思いがこみ上げてきて、漁師を継ぐことになったとのこと。

現在はお父さんの小型定置の経営に参加し、おおむね4月から10月の間、お父さんと3人の従業員との計5人で小型定置網の操業を行っています。昔は高い値段で売れたブリなどの青物が安くなってしまいましたが、最近はサワラが販売の主力となっているそうです。定置網は各部分の形状や潮流による網の吹かれなどにより漁獲量が大きく変化することが知られていますが、松尾さんは実際に定置網の中に潜って、目で見てそれを実感し、乗り込みの角度や網目の大きさなどに注意を払っています。

また、冬季に操業できないという日本海の小型定置網のハンディキャップを克服するために、ちりめん工場を閉めた後にお母さんが始めた民宿の経営に力を入れており、いわば6次産業化の先駆けともいえます。この地域は夏の海水浴客だけでなく、冬のズワイガニ目当ての客も多く、地の利を生かした経営を行っています。さらにそれ以外のシーズンの対策として体験漁業の取り組みを考えていきたいとのこと。

## 魚を獲るだけじゃない

松尾さんのもう一つの特徴は個別の漁業経営にとどまらない幅広い活動を行っていることにもあります。琴引浜は鳴き砂の浜として全国的にも有名な場所ですが、鳴き砂は環境が悪化すると鳴かなくなってしまう非常にデリケートなものです。そこで琴引浜の鳴き砂を守る会を設立し、浜の清掃等の保全活動や「入場料は拾ったゴミ」という鳴き砂コンサートの開催、関係各所の協力を受けた琴引浜鳴き砂文化館の設置などの活動をしています。



### 漁業収入だけでなく、民宿の経営も行う生計を立てている。

また、漁業権への理解を深め、一般市民と漁協組合員とのギャップや市民から遠のきつつある海との距離を縮めたいとの思いから「一日漁師証」の取り組みを行っています。これは、共同漁業権水域内で区域、日時、体長などの入漁規則を守ることを条件に一定の料金で素潜りまたは徒手採捕をおこなってもらうというものです。このアイデアを最初に提案したときには反対にあ

ったそうですが、粘り強く説得し、平成 19 年から開始されました。この催しに参加した人は漁業権への理解を深め、決してたくさん獲ったりすることはせず、海の恵みのすばらしさ、漁の大変さを学んで、満足して帰って行かれるとのことでした。

## 次世代のためにできること

平成 20 年からは漁業や漁村の魅力を伝える「ザ・漁師'S」の創設メンバーとして、講演会の開催、就業フェアへの参加など全国的な活動を行っています。ザ・漁師'S は全国漁業就業者確保育成センターにより漁業や漁村の魅力を伝える漁業メッセンジャーとして結成されたものです。松尾さんは、4 人の初代メンバーの一人として、「漁業就業支援フェア」やマスコミ各社で漁業の魅力を伝える活動を展開してきました。

平成 22 年にはザ・漁師'S のメンバーが中心となって漁業の活性化を目的としたエンジョイ・フィッシャーマンという会社を設立しました。この会社では漁業を次世代に受け継げる事業として展開していくため、元気の出る漁村づくり、儲かる漁師づくり、楽しい漁師のネットワークづくり、消費者・関係諸事業・漁師間のネットワークづくりといったことを支援していくこととしています。

このように漁業者として立場を大事にししながら、地域での活動を進め、さらにそれを全国に広めているアクティブな松尾さんの今後に注目です。

## 魚食歳時記：ずわいがに

雄は「松葉がに」、「越前がに」、雌は、「せいこ」、「こうぼこ」と地方名が色々ある。多分まだまだ呼び名はあるのだろう。幼い頃の記憶の糸を手繰ると、山陰線の嵯峨駅（現在の嵯峨嵐山駅）で行商のおばさんが運んできた雌蟹は確か「こっぺ」と呼ばれ、買い求めて虫養いにしていた。その名から、山陰線に揺られ丹後から運ばれてきたものだったのだ。hh